
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ
(例) 部屋《へや》

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号
(例) 四十|格好《がつこう》

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定
(数字は、JIS X 0213の面区点番号、または底本のページと行数)
(例) [# 「勺<タ」、第3水準1-14-76]

部屋《へや》の隅に据えた姿見《すがたみ》には、西洋風に壁を塗った、しかも日本風の畳がある、上海《シャンハイ》特有の旅館の二階が、一部分はっきり映《うつ》っている。まずつきあたりに空色の壁、それから真新しい何畳《なんじょう》かの畳《たたみ》、最後にこちらへ後《うしろ》を見せた、西洋髪《せいようがみ》の女が一人、それが皆冷やかな光の中に、切ないほどはっきり映っている。女はそこにさっきから、縫物《ぬいもの》か何かしているらしい。

もっとも後は向いたと云う条、地味《じみ》な銘仙《めいせん》の羽織の肩には、崩《くず》れかかった前髪《まえがみ》のはずれに、蒼白い横顔が少し見える。勿論肉の薄い耳に、ほんのり光が透《す》いたのも見える。やや長めな揉《も》み上《あ》げの毛が、かすかに耳の根をぼかしたのも見える。

この姿見のある部屋には、隣室の赤児の啼《な》き声のほかに、何一つ沈黙を破るものはない。未《いまだ》に降り止まない雨の音さえ、ここでは一層その沈黙に、単調な気もちを添えるだけである。

「あなた。」

そう云う何分《なんぶん》かが過ぎ去った後《のち》、女は仕事を続けながら、突然、しかし覚束《おぼつか》なさそうに、こう誰かへ声をかけた。

誰か、部屋の中には女のほかに、丹前《たんぜん》を羽織《はお》った男が一人、ずっと離れた畳の上に、英字新聞をひろげたまま、長々《ながなが》と腹這《はらば》いになっている。が、その声が聞えないのか、男は手近の灰皿へ、巻煙草《まきたばこ》の灰を落したきり、新聞から眼さえ挙げようとしなない。

「あなた。」

女はもう一度声をかけた。その癖女自身の眼もじっと針の上に止まっている。「何だい。」

男は幾分うるさそうに、丸々《まるまる》と肥った、口髭《くちひげ》の短い、活動家らしい頭を擡《もた》げた。

「この部屋ね、この部屋は変えちゃいけないくて？」

「部屋を変える？ だってここへはやっと昨夜《ゆうべ》、引っ越して来たばかりじゃないか？」

男の顔はげげんそうだった。

「引っ越して来たばかりでも。前の部屋ならば明《あ》いているでしょう？」

男はかれこれ二週間ばかり、彼等が窮屈な思いをして来た、日当りの悪い三階の部屋が一瞬間眼の前に見えるような気がした。塗りの剥《は》げた窓側《まどがわ》の壁には、色の変った畳の上に更紗《さらさ》の窓掛けが垂れ下っている。その窓にはいつ水をやったか、花の乏しい天竺葵《ジェラニウム》が、薄い埃《ほこり》をかぶっている。おまけに窓の外を見ると、始終ごみごみした横町《よこちょう》に、麦藁帽《むぎわらぼう》をかぶった支那《シナ》の車夫が、所在なさそうにうろついている。……

「だがお前はあの部屋にいるのは、嫌《いや》だ嫌だと云っていたじゃないか？」

「ええ。それでもここへ来て見たら、急にまたこの部屋が嫌《いや》になったんですもの。」

女は針の手をやめると、もの憂《う》そうに顔を挙げて見せた。眉《まゆ》の迫った、眼の切れの長い、感じの鋭そうな顔だちである。が、眼のまわりの量《かさ》を見ても、何か苦勞を堪《こら》えている事は、多少想像が出来ないでもない。そう云えば病的な気がするくらい、米嚙《こめか》みにも静脈《じょうみゃく》が浮き出している。

「ね、好《い》いでしょう。……いけないくて？」

「しかし前の部屋よりは、広くもあるし居心《いごころ》も好《い》いし、不足を云う理由はないんだから、それとも何か嫌《いや》な事があるのかい？」

「何って事はないんですけど。……」

女はちょっとためらったものの、それ以上立ち入っては答えなかった。が、もう一度念を押すように、同じ言葉を繰り返した。

「いけなくって、どうしても？」

今度は男が新聞の上へ煙草《たばこ》の煙を吹きかけたぎり、好《い》いとも悪いとも答えなかった。部屋の中はまたひっそりになった。ただ外では不相変《あいかわらず》、休みのない雨の音がしている。

「春雨《はるさめ》やか、」

男はしばらくたった後《のち》、ごろりと仰向《あおむ》きに寝転《ねころ》ぶと、独り言のようにこう云った。

「蕪湖《ウウフウ》住みをするようになったら、発句《ほっく》でも一つ始めるかな。」

女は何とも返事をせずに、縫物の手を動かしている。

「蕪湖《ウウフウ》もそんなに悪い所じゃないぜ。第一社宅は大きいし、庭も相当に広いしするから、草花など作るには持って来いだ。何でも元は雍家花園《ようかかえん》とか云ってね、」

男は突然口を噤《つぐ》んだ。いつか森《しん》とした部屋の中には、かすかに人の泣くけはいがしている。

「おい。」

泣き声は急に聞えなくなった。と思うとすぐにまた、途切《とぎ》れ途切れに続き出した。

「おい。敏子《としこ》。」

半ば体を起した男は、畳に片肘《かたひじ》靠《もた》せたまま、当惑《とうわく》らしい眼つきを見せた。

「お前は己《おれ》と約束したじゃないか？ もう愚痴《ぐち》はこぼすまい。もう涙は見せない事にしよう。もう、」

男はちょっと瞼《まぶた》を挙げた。

「それとも何かあの事以外に、悲しい事でもあるのかい？ たとえば日本へ帰りたいとか、支那でも田舎《いなか》へは行きたくないとか、」

「いいえ。いいえ。そんな事じゃなくってよ。」

敏子は涙を落し落し、意外なほど烈《はげ》しい打消し方をした。

「私はあなたのいらっしゃる所なら、どこへでも行く気でいるんです。ですけれども、」

敏子は伏眼《ふしめ》になったなり、溢《あふ》れて来る涙を抑《おさ》えようとするのか、じっと薄い下唇《したくちびる》を噛んだ。見れば蒼白い頬《ほお》の底にも、眼に見えない炎《ほのお》のような、切迫した何物かが燃え立っている。震《ふる》える肩、濡れた睫毛《まつげ》、男はそれらを見守りながら、現在の気もちとは没交渉に、一瞬間妻の美しさを感じた。

「ですけれども、この部屋は嫌《いや》なんですもの。」

「だからさ、だからさっきもそう云ったじゃないか？ 何故《なぜ》この部屋がそんなに嫌だか、それさえはっきり云ってくれば、」

男はここまで云いかけると、敏子の眼がじっと彼の顔へ、注《そそ》がれているのに気がついた。その眼には涙の漂《ただよ》った底に、ほとんど敵意にも紛《まが》い兼ねない、悲しそうな光が閃《ひらめ》いている。何故この部屋が嫌になったか？ それは独り男自身の疑問だったばかりではない。同時にまた敏子が無言《むごん》の内に、男へ突きつけた反問である。男は敏子と眼を合せながら、二の句を次ぐのに躊躇《ちゅうちょ》した。

しかし言葉が途切《とぎ》れたのは、ほんの数秒の間《あいだ》である。男の顔には見る見る内に、了解の色が漲《みなぎ》って来た。

「あれか？」

男は感動を蔽《おお》うように、妙に素《そ》っ気《け》のない声を出した。

「あれは己も気になっていたんだ。」

敏子は男にこう云われると、ぼろぼろ膝の上へ涙を落した。

窓の外にはいつのまにか、日の暮が雨を煙らせている。その雨の音を撥《は》ねのけるように、空色の壁の向うでは、今もまた赤児《あかご》が泣き続けている。……

二

二階の出窓《でまど》には鮮《あざや》かに朝日の光が当たっている。その向うには三階建の赤煉瓦《あかれんが》にかすかな苔《こけ》の生えた、逆光線の家が聳えている。薄暗いこちらの廊下《ろうか》にいと、出窓はこの家を背景にした、大きい一枚の画《え》のように見える。巖乗《がんじょう》な櫺《かし》の窓枠《まどわく》が、ちょうど額縁《がくぶち》を嵌《は》めたように見える。その画のまん中には一人の女が、こちらへ

横顔を向けながら、小さな靴足袋《くつたび》を編んでいる。

女は敏子《としこ》よりも若いらしい。雨に洗われた朝日の光は、その肉附きの豊かな肩へ、派手《はで》な大島の羽織の肩へ、はっきり大幅に流れている。それがやや俯向《うつむ》きになった、血色の好《い》い頬に反射している。心もち厚い唇の上の、かすかな生《う》ぶ毛《げ》にも反射している。

午前十時と十一時との間、旅館では今が一日中でも、一番静かな時刻である。商売に来たのも、見物に来たのも、泊《とま》り客は大抵《たいてい》外出してしまう。下宿している勤《つと》め人《にん》たちも勿論午後までは帰って来ない。その跡にはただ長い廊下に、時々上草履《うわぞうり》を響かせる、女中の足音だけが残っている。

この時もそれが遠くから、だんだんこちらへ近づいて来ると、出窓に面した廊下には、四十格好《がっこう》の女中が一人、紅茶の道具を運びながら、影画《かげえ》のように通りかかった。女中は何とも云われなかったら、女のいる事も気がつかずに、そのまま通りすぎてしまったかも知れない。が、女は女中の姿を見ると、心安そうに声をかけた。

「お清《きよ》さん。」

女中はちょっと会釈《えしゃく》してから、出窓の方へ歩み寄った。

「まあ、御精《ごせい》が出ますこと。坊ちゃんはどうなさいました？」

「うちの若様？ 若様は今お休み中。」

女は編針《あみばり》を休めたまま、子供のように微笑した。

「時にね、お清さん。」

「何でございます？ 真面目《まじめ》そうに。」

女中も出窓の日の光に、前掛《まえかけ》だけくっきり照らさせながら、浅黒い眼もとに微笑を見せた。

「御隣の野村《のむら》さん、野村さんでしょう、あの奥さんは？」

「ええ、野村敏子さん。」

「敏子さん？ じゃ私《わたし》と同じ名だね。あの方はもう御立ちになったの？」

「いいえ、まだ五六日は御滞在《ごたいざい》でございましょう。それから何でも蕪湖《ウウフウ》とかへ、」

「だってさっき前を通ったら、御隣にはどなたもいらっしゃらなかったわよ。」「ええ、昨晚《さくばん》急にまた、三階へ御部屋が変りましたから、」

「そう。」

女は何か考えるように、丸々《まるまる》した顔を傾けて見せた。

「あの方でしょう？ ここへ御出でになると、その日に御子さんをなくなしたのは？」

「ええ。御気の毒でございますわね。すぐに病院へも御入れになったんですけれど。」

「じゃ病院で御なくなりなすったの？ 道理で何にも知らなかった。」

女は前髪《まえがみ》を割った額《ひたい》に、かすかな憂鬱の色を浮べた。が、すぐにまた元の通り、快活な微笑を取り戻すと、悪戯《いたづら》そうな眼つきになった。

「もうそれで御用済み。どうかあちらへいらして下さい。」

「まあ、随分でございますね。」

女中は思わず笑い出した。

「そんな邪慳《じゃけん》な事をおっしゃると、薦《つた》の家《や》から電話がかかって来ても、内証《ないしょ》で旦那様へ取次ぎますよ。」

「好《い》いわよ。早くいらっしゃってば。紅茶がさめてしまうじゃないの？」

女中が出窓にいなくなると、女はまた編物を取り上げながら、小声に歌をうたい出した。

午前十時と十一時との間、旅館では今が一日中でも、一番静かな時刻である。部屋毎《ごと》の花瓶に素枯《すが》れた花は、この間《あいだ》に女中が取り捨ててしまう。二階三階の真鍮《しんちゅう》の手すりも、この間に下男《ボオイ》が磨くらしい。そう云う沈黙が拡《ひろ》がった中に、ただ往来のざわめきだけが、硝子《ガラス》戸を開《あ》け放した諸方の窓から、日の光と一しょにはいつて来る。

その内にふと女の膝《ひざ》から、毛糸の球《たま》が転げ落ちた。球はとんと弾《はず》むが早いか、一筋の赤を引きずりながら、ころころ廊下《ろうか》へ出ようとする、と思うと誰か一人、ちょうどそこへ来かかったのが、静かにそれを拾い上げた。

「どうも有難《ありがと》うございました。」

女は籐椅子《とういす》を離れながら、恥しそうに会釈《えしゃく》をした。見れば球を拾ったのは、今し方女中と噂をした、瘦《や》せぎすな隣室の夫人である。

「いいえ。」

毛糸の球は細い指から、脂《あぶら》よりも白い括《くく》り指へ移った。

「ここは暖かでございますね。」

敏子は出窓へ歩み出ると、眩《まぶ》しそうにやや眼を細めた。

「ええ、こうやって居りまして、居睡《いねむ》りが出るくらいでございますわ。」
二人の母は佇《たたず》んだまま、幸福そうに微笑し合った。
「まあ、御可愛いあた[# 「たあた」に傍点]ですこと。」
敏子の声はさりげなかった。が、女はその言葉に、思わずそっと眼を外《そ》らせた。
「二年ぶりに編針を持って見ましたの。 あんまり暇なもんですから。」
「私なぞはいくら暇でも、怠《なま》けてばかり居りますわ。」
女は籐椅子《とういす》へ編物を捨てると、仕方がなさそうに微笑した。敏子の言葉は無心の内に、もう一度女を打ったのである。
「お宅の坊ちゃんは、 坊ちゃんてございましたわね？ いつ御生れになりましたの？」
敏子は髪へ手をやりながら、ちらりと女の顔を眺めた。昨日《きのう》は泣き声を聞いているのも堪えられない気がした隣室の赤児、 それが今では何物よりも、敏子の興味を動かすのである。しかもその興味が満足させれば、反《かえ》って苦しみを新たにするのも、はっきりわかってはいるのである。これは小さな動物が、コブラの前では動けないように、敏子の心もいつのまにか、苦しみそのものの催眠作用に捉《とら》われてしまった結果であろうか？ それともまた手傷《てきず》を負った兵士が、わざわざ傷口を開いてまでも、一時の快《かい》を貪《むさぼ》るように、いやが上にも苦しまねばやまない、病的な心理の一例であろうか？
「この御正月でございました。」
女はこう答えてから、ちょいとためらう気色《けしき》を見せた。しかしすぐ眼を挙げると、気の毒そうにつけ加えた。
「御宅ではとんだ事でございましたってねえ。」
敏子は沾《うる》んだ眼の中に、無理な微笑を漂わせた。
「ええ、肺炎《はいえん》になりましたものですから、 ほんとうに夢のようでございました。」
「それも御出《おいで》て [# 「ㄅ<夕」、第3水準1-14-76]々《そうそう》にねえ。何と申し上げて好《よ》いかわかりませんわ。」
女の眼にはいつのまにか、かすかに涙が光っている。
「私なぞはそんな目にあったら、まあ、どうするでございましょう？」
「一時は随分《ずいぶん》悲しゅうございましたけれども、 もうあきらめてしまいましたわ。」
二人の母は佇《たたず》んだまま、寂しそうな朝日の光を眺めた。
「こちらは悪い風《かぜ》が流行《はや》りますの。」
女は考え深そうに、途切《とぎ》れていた話を続け出した。
「内地はよろしゅうございますわね。気候もこちらほど不順ではなし、」
「参りたてでよくはわかりませんが、大へん雨の多い所でございますね。」
「今年は余計 あら、泣いて居りますわ。」
女は耳を傾けたまま、別人のような微笑を浮べた。
「ちょいと御免下さいまし。」
しかしその言葉が終らない内に、もうそこへはさっきの女中が、ばたばた上草履《うわぞうり》を鳴らせながら、泣き立てる赤児《あかご》を抱《だ》きそやして来た。赤児を、 美しいメリンスの着物の中に、しかめた顔ばかり出した赤児を、 敏子が内心見まいとしていた、丈夫そうに頤《あご》の括《くく》れた赤児を！
「私が窓を拭《ふ》きに参りますとね、すぐにもう眼を御覚ましなすって。」
「どうも憚《はばか》り様。」
女はまだ慣《な》れなそうに、そっと赤児を胸に取った。
「まあ、御可愛い。」
敏子は顔を寄せながら、鋭い乳の臭いを感じた。
「おお、おお、よく肥《ふと》っていらっしゃる。」
やや上気《じょうき》した女の顔には、絶え間ない微笑が満ち渡った。女は敏子の心もちに、同情が出来ない訳ではない。しかし、 しかしその乳房《ちぶさ》の下から、 張り切った母の乳房の下から、汪然《おうぜん》と湧いて来る得意の情は、どうする事も出来なかったのである。

三

雍家花園《ようかかえん》の槐《えんじゅ》や柳は、午《ひる》過ぎの微風に戦《そよ》ぎながら、庭や草や土の上へ、日の光と影とをふり撒《ま》いている。いや、草や土ばかりではない。その槐《えんじゅ》に張り渡した、この庭には似合《にあ》わない、水色のハムモックにもふり撒《ま》いている。ハムモックの中に仰向《あおむ》けになった、夏のズボンに胴衣《チョッキ》しかつけない、小肥《こぶと》りの男にもふり撒いている。

男は葉巻に火をつけたまま、槐《えんじゅ》の枝に吊《つ》り下げた、支那風の鳥籠を眺めている。鳥は文鳥

《ぶんちょう》か何からしい。これも明暗の斑点《はんでん》の中に、止《とま》り木《ぎ》をあちこち伝わっては、時々さも不思議そうに籠の下を男を眺めている。男はその度にほほ笑《え》みながら、葉巻を口へ運ぶ事もある。あるいはまた人と話すように、「こら」とか「どうした?」とか云う事もある。

あたりは庭木の戦《そよ》ぎの中に、かすかな草の香《か》を蒸《む》らせている。一度ずっと遠い空に汽船の笛《ふえ》の響いたぎり、今はもう人音《ひとおと》も何もしない。あの汽船はとうに去ったであろう。赤濁《あかにご》りに濁った長江《ちょうこう》の水に、眩《まばゆ》い水脈《みお》を引いたなり、西か東かへ去ったであろう。その水の見える波止場《はとば》には、裸も同様な乞食《こじき》が一人、西瓜《すいか》の皮を噛《か》じっている。そこにはまた仔豚《こぶた》の群《むれ》も、長々《ながなが》と横たわった親豚の腹に、乳房《ちぶさ》を争っているかも知れない、小鳥を見るのにも飽《あ》きた男は、そんな空想に浸《ひた》ったなり、いつかうとうと眠りそうになった。

「あなた。」

男は大きい眼を明いた。ハムモックの側に立っているのは、上海《シャンハイ》の旅館にいた時より、やや血色の好《い》い敏子《としこ》である。髪にも、夏帯にも、中形《ちゅうがた》の湯帷子《ゆかた》にも、やはり明暗の斑点を浴びた、白粉《おしろい》をつけない敏子である。男は妻の顔を見たまま、無遠慮に大きい欠伸《あくび》をした。それからさも大儀《たいぎ》そうに、ハムモックの上へ体を起した。

「郵便よ、あなた。」

敏子は眼だけ笑いながら、何本か手紙を男へ渡した。と同時に湯帷子《ゆかた》の胸から、桃色の封筒《ふうとう》にはいっている、小さい手紙を抜いて見せた。

「今日は私にも来ているのよ。」

男はハムモックに腰かけたなり、もう短い葉巻を噛み噛み、無造作《むぞうさ》に手紙を読み始めた。敏子もそこへ佇《たたず》んだまま、封筒と同じ桃色の紙へ、じっと眼を落している。

雍家花園《ようかかえん》の槐《えんじゅ》や柳は、午過ぎの微風に戦《そよ》ぎながら、この平和な二人の上へ、日の光と影とをふり撒いている。文鳥《ぶんちょう》はほとんど囀《さえず》らない。何か唸《うな》る虫が一匹、男の肩へ舞い下りたが、直《すぐ》にそれも飛び去ってしまった。……

こう云うしばらくの沈黙の後《のち》、敏子は伏せた眼も挙げずに、突然かすかな叫び声を出した。

「あら、お隣の赤さんも死んだんですって。」

「お隣?」

男はちょっと聞き耳を立てた。

「お隣とはどこだい?」

「お隣よ。ほら、あの上海《シャンハイ》の××館の、」

「ああ、あの子供か? そりゃ気の毒だな。」

「あんなに丈夫そうな赤さんがねえ。……」

「何だい、病気は?」

「やっぱり風邪《かぜ》ですって。始めは寝冷えぐらいの事と思い居り候ところ、ですって。」

敏子はやや興奮したように、口早に手紙を読み続けた。

「病院に入れ候時には、もはや手遅れと相成り、ね、よく似ているでしょう? 注射を致すやら、酸素吸入《さんそきゅうにゅう》を致すやら、いろいろ手を尽し候えども、それから何と読むのかしら? 泣き声だわ。泣き声も次第に細るばかり、その夜の十一時五分ほど前には、ついに息を引き取り候。その時の私の悲しさ、重々《じゅうじゅう》御察し下され度《たく》、……」

「気の毒だな。」

男はもう一度ハムモックに、ゆらりと仰向《あおむ》けになりながら、同じ言葉を繰返した。男の頭のどこかには、未《いまだ》に瀕死《ひんし》の赤児が一人、小さい喘《あえ》ぎを続けている。と思うとその喘ぎは、いつかまた泣き声に変わってしまう。雨の音の間《あいだ》を縫った、健康な赤児の泣き声に。男はそう云う幻《まぼろし》の中にも、妻の読む手紙に聴き入っていた。

「重々御察し下され度、それにつけてもいつぞや御許様《おんもとさま》に御眼《おんめ》にかかりし事など思い出《いだ》され、あの頃はさぞかし御許様にも、ああ、いや、いや。ほんとうに世の中はいやになってしまふ。」

敏子は憂鬱な眼を挙げると、神経的に濃い眉《まゆ》をひそめた。が、一瞬の無言の後《のち》、鳥籠《とりかご》の文鳥を見るが早いか、嬉しそうに華奢《きゃしゃ》な両手を拍った。

「ああ、好《い》い事を思いついた! あの文鳥を放してやれば好いわ。」

「放してやる? あのお前の大事の鳥をか?」

「ええ、ええ、大事の鳥でもかまわなくてよ。お隣の赤さんのお追善《ついぜん》ですもの。ほら、放鳥《ほうちょう》って云うでしょう。あの放鳥をして上げるんだわ。文鳥だってきっと喜んでよ。私には手がとどかないかしら? とどかなかったら、あなた取って頂戴《ちょうだい》。」

槐《えんじゅ》の根もとに走り寄った敏子は、空気草履《くうきぞうり》を爪立《つまだ》てながら、出来る

だけ腕を伸ばして見た。しかし籠を吊した枝には、容易に指さえとどこうとしない。文鳥は気でも違ったように、小さい翼《つばさ》をばたばたやる。その拍子《ひょうし》にまた餌壺《えつぼ》の黍《きび》も、鳥籠の外に散乱する。が、男は面白そうに、ただ敏子を眺めていた。反《そ》らせた喉《のど》、膨《ふくら》んだ胸、爪先《つまさき》に重みを支えた足、　　そう云う妻の姿を眺めていた。

「取れないかしら？　　取れないわ。」

敏子は足を爪立《つまだ》てたまま、くると夫の方へ向いた。

「取って頂戴よ。よう。」

「取れるものか？ 踏み台でもすれば格別だが、　　何もまた放すにしても、今 | 直《すぐ》には限らないじゃないか？」

「だって今直に放したいんですもの、よう。取って頂戴よう。取って下さなければいじめるわよ。よくって？ ハムモックを解いてしまうわよ。」

敏子は男を睨《にら》むようにした。が、眼にも唇にも、漲《みなぎ》っているものは微笑である。しかもほとんど平静を失した、烈しい幸福の微笑である。男はこの時妻の微笑に、何か酷薄《こくはく》なものさえ感じた。日の光に煙った草木《くさき》の奥に、いつも人間を見守っている、気味の悪い力に似たものさえ。

「莫迦《ばか》な事をするなよ。」

男は葉巻を投げ捨てながら、冗談《じょうだん》のように妻を叱った。

「第一あの何とか云った、お隣の奥さんにもすまないじゃないか？ あっちじゃ子供が死んだと云うのに、こっちじゃ笑ったり騒いだり、……」

すると敏子はどうしたのか、突然蒼白い顔になった。その上 | 拗《す》ねた子供のように、睫毛《まつげ》の長い眼を伏せると、別に何と云う事もなしに、桃色の手紙を破り出した。男はちょいと苦《にが》い顔をした。が、気まずさを押しのけるためか、急にまた快活に話し続けた。

「だがまあ、こうしてられるのは、とにかく仕合せには違いないね。上海《シャンハイ》にいた時には弱ったからな。病院にいれば気ばかりあせるし、いなければまた心配するし、　　」

男はふと口を嚙《つく》んだ。敏子は足もとに眼をやったなり、影になった頬《ほお》の上に、いつか涙を光らせている。しかし男は当惑そうに、短い口髭《くちひげ》を引張ったきり、何ともその事は云わなかった。

「あなた。」

息苦しい沈黙の続いた後《のち》、こう云う声が聞えた時も、敏子はまだ夫の前に、色の悪い顔を背《そむ》けていた。

「何だい？」

「私は、　　私は悪いんでしょうか！ あの赤さんのなくなったのが、　　」

敏子は急に夫の顔へ、妙に熱のある眼を注いだ。

「なくなったのが嬉しいんです。御気の毒だとは思いうんですけれども、　　それでも私は嬉しいんです。嬉しくては悪いんでしょうか？ 悪いんでしょうか？ あなた。」

敏子の声には今までにない、荒々《あらあら》しい力がこもっている。男はワイシャツの肩や胴衣《チョッキ》に今は一ぱいにさし始めた、眩《まばゆ》い日の光を鍍金《めっき》しながら、何ともその問に答えなかった。何か人力に及ばないものが、厳然と前へでも塞《ふさ》がったように。

[# 地から 1 字上げ] (大正十年八月)

底本：「芥川龍之介全集4」ちくま文庫、筑摩書房

1987 (昭和62) 年1月27日第1刷発行

1996 (平成8) 年7月15日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971 (昭和46) 年3月～1971 (昭和46) 年11月

入力：j.utiyama

校正：もりみつじゅんじ

1999年3月1日公開

2004年3月7日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。